

林屋辰三郎著

中世文化の基調

暗黒時代とよばれた中世の文化に於いて基調といふべきものは何であらうか。私のよき先達である林屋辰三郎氏は、この問題に關聯する過去十余年の業績を集成し「中世文化の基調」を世に問われた。新しい民族文化の形成が要請されている昨今、過去の文化遺産の中に新民族文化創造の礎石を求めざる事は、我々歴史家の看過すべからざる問題である。氏の考究の主対象たる芸能・文化は、まさしく今日に生き続けて居る伝統芸術であり、その生成過程を理解し、継承の方法を学ぶことは、我々の緊急の課題である。夙に伝統芸術に深い関心と教養を持たれ、その正しき發展に精力的な努力を續けて居られる著者が、該問題に關する労作を上梓された事は慶祝の極と言ふべきである。淺学の筆者が、以下敢て紹介の筆を執るのも、ささやかな慶祝の意を

表白せんとする為に外ならない。

本書は「序説にかえて」「Ⅰ中世文化の形成」「Ⅱ郷民の組織と文化」「Ⅲ町衆の生活と芸術」「Ⅳ近世文化の黎明」に分れ、全体で二十一篇の論稿より構成されている。「Ⅰ中世文化の形成」「Ⅱ中世文化の成立」「Ⅲ中世文化の形成」では最初の一篇に氏の体系が窺われる。中世文化とは古代末期から中世全体にかけて、奴隸制の束縛を破り封建的小農民に成長しつつある民衆の中に成立した文化である。中世文化のこの特質は繪巻物からお伽草子への發展の中に例証され得る。保元、平治―承久の中世の最初の変革期に著しくあらわれる繪巻物は、繪画の中に文学的時間の變化を表現する革新的芸術である。この革新性は、多人数の協同、非専門家の参加によつて齎されたが、更に畿内民たる繪解、南都絵所の庶衆に媒介され、新興の京都町衆に支えられてお伽草子となつた。かくて社会の變革の中に第二の中世文化が成立した。

さてこの第二の中世文化を語る「Ⅱ郷民の組織と文化」「Ⅲ近江須賀神社とその村落」外五篇「Ⅳ町衆の生活と芸術」「Ⅴ町衆の成立」

外五篇)こそ全篇の中核部である。南北朝内亂以後の封建的自營農民の成長と共に、彼等の自治的共同体として生れた郷村制について、氏は近江の菅浦、大和の法隆寺東西兩郷に於ける郷民組織を分析される。保良社・日吉社・龍田社等を中心とする住民の一味同心による自治が、或は南北朝内亂等の戰亂の中に、或は堺相論・漁業権・灌溉等の日常村落生活の営みの中に、或は郷民同樂の場である能・猿樂の上演の中に具体的に追求されて居る。特に氏は菅浦の場合、禁裡供御人としての住民の結合が、南北朝内亂に際して新自治機構に克服された事を述べて居られる。かかる村落自治は上述の農民の成長を前提とするものであり、またかかる自治的な村落生活の中から民族意識の原初的形態たる郷土愛も生れたのである。

斯くて郷村制の成立により、農村の變革が進行する一方、古代のミヤコ平安京は、貨幣經濟の發展に伴い、農村に地盤をおく商業都市マテへと變つて行く。古代國家や鎌倉幕府の権力によつて、防犯機關に留められては居たが、南北朝内亂―応仁文明の亂による焦土

化の後に、新しい生活組織体としての自治的団結を持ったマチは生れる。古代的なミヤコは戦火の彼方に逝き、町衆をあるじとする中世的なマチは不死鳥の如く生誕する。

所で町衆は商工業者を主体とし乍ら、土倉を中核とし、没落公家衆をも加えた為、経済的に土倉、文化的に公家の影響を免れぬと言ふ限界をもつ。同じく反封建闘争たる一向一揆(農民)と法華一揆(町衆)の悲しき抗争が生れ、この天文法華一揆こそ、農民の山城国一揆と同様に、町衆のエネルギの最後の昂揚となる。町衆の自治体は土倉的な上層町衆により、支配者に売渡され、防犯連坐の具と化す。我国の伝統芸術として今日に伝わる茶能・狂言は、かかる郷民、町衆に支えられていた。南北朝内乱の結果、階級的対立が類型をとつて現われ、茶・猿楽等にも二類型の対立が生れた。茶の場合、貴族的な「茶数寄」と、農民の一味同心の場としての「茶寄合」の対立である。この二側面は、珠光・紹鴨―利久を通じて止揚され、「茶寄合」の理念が強く貫かれた。猿楽から分化した能・狂言にも同様の経緯が見られる。宗教行事も町衆によつて

娯楽的な隔、祭として町衆の団塊に供された。然し前述の支配者信長・秀吉の出現は、かかる民衆文化を弾圧し、一味同心的な茶道にも転形を強制した。

右の叙述によつて既に暗さを感じさせる近世文化について氏は「IV 近世文化の黎明」〔出雲阿国〕外四篇で考究される。新しい専制支配を表現するのは、領国支配の象徴たる城郭である。城の中心たる天守、内部裝飾たる襖絵は、領民への威圧を加える儒教的・世界観に覆われ、襖絵を彩る黄金に、専制支配者と彼に身売した上層町衆(高利貸の富商)の妥協が看取される。町衆の育てた芸能も、家学(芸)と専制権力の抱合に芸術の發展を阻害する家元制度となり果てた。然し抑圧の下にも町人は、その富に拠つて僅かに抵抗する。上層町衆は、幕府に結ぶ一方、宮廷と結び、日本の伝統に基き儒教的な封建支配の理念に抵抗し、寛永の宗達を生み、歌舞伎・浮世絵等の元禄文化への傾斜を示す。

巻頭の「民族意識の萌芽的形態」は全篇の序説であり結論でもある。中世文化について着実な歴史家としての卓越した手腕を示され

た氏は、前記の史料を駆使し現実の实践的課題に肉薄される。民族の重要な一面は言語・地域・経済生活・文化等の共通性にある。かかる共通性を生む基盤は郷村にあり、郷村制成立期に於いて初めて民衆は、民族意識の萌芽的形態たる郷土愛を抱く。中世の民衆は郷村制によつて結集し、古代的束縛を破り、封建権力と戦い勝れた文化を創成した。純粹封建制の成立は、彼等の自治組織を防犯連坐の組織に脱胎したが、此の民族意識の芽は脈々と伝えられ、近代に入つて民族意識の成長期を迎える潜勢力となつたとされて居る。

この様に氏は民衆を信じ歴史の進歩を信じ、現代の歴史家としての正しい生き方を示される。また氏は従来の業績を広く且深く咀嚼し乍ら、隨所に新知見を開陳される勝れた批評的態度に終始して居られる。国文学その他関係諸学への批判は、それらの学問へのよき問題提起たり得たであらう。「町衆の成立」に於ける勝れた理論家である氏は、また「運慶」に於ける着実な考証家でもある。紙数の都合上紹介できなかつた珠玉の小品にも氏の洞察と睿智は窺われる。この様な態度によつ

て、暗黒と片付けられた中世文化に、積極的な体系付けを行われ、研究上の暗黒を打開された点に本書の高い価値が認められる。只若干の点につき疑問を述べ、御教示を仰ぎたい。

氏の努力により、中世―暗黒時代とする伝説は覆され、反つて中世文化に輝かしい光明が認められた。に拘らず私は、依然として、中世文化に暗黒面が強くなかつたかと言う疑問を氷解することができない。氏は郷民(町衆)とその文化の限界を指摘され乍ら、その文化に対する積極的評価に比して懐疑の聲は甚だ弱い様に思われる。私の疑問を解決して頂く為に次の諸点を提唱したいと思う。

第一に郷村(町組)制の構成について、一層具体的な分析をお願いする。氏は郷村(町組)内部の諸階層についての考察をも行つて居られるが、それは組織・機能等いわば法制的研究の観が少くない。各階層の本質、相互の關係についての一層つきつめた研究が行われぬ限り、郷村(町組)制の發展性と停滞性を実感的に知ることが難かしく、氏の隨所に使用される「民衆」「庶民」が具体的に何を

意味するか把握し難い。例えば氏は公家衆が町衆に吸収され、文化的に町衆に影響を及ぼすとされる^{二〇}。然しどの様な形で公家が吸収されたかは明かにされず、又文化的に影響を及ぼしたと言われ乍ら、その具体的内容については、お伽草子の貴族性に若干蝕れて居られる程度である。又よし文化的に影響があつたにせよ、町衆の行動に果してどれ程に制約を与えたであろうか。経済的に町衆を制約した土倉と対比すべくもないのは当然であろう。この点を明確にせぬ限り、「公家衆自身は町衆たり得ないが」と言う氏の深い配慮も不注意に読み過ぎられる危険がある。この点町衆と町人を区別された村山修一氏の説に示唆的なものがある。日本都市生活の源流一六七頁

第二にこの様な基盤の上に成立した郷民(町衆)文化について、氏の評価は全然肯定的、希望的である。に拘らず近世に於いて家元制度の様な停滞の様相を来した原因は、果して氏の所謂専制支配者の政策のみに帰し得るであろうか。前記の郷村(町組)制の弱さは当然その文化の上にも反映した筈であつて、此等の文化の荷担者についてのより具体

的な分析を行う一方、それを基礎として文化自体の内在的な弱さを追求する必要がある。時代はずれるが、絵巻物よりお伽草子への発展については氏の説に承服するとして、絵巻物自体は鎌倉末期に至つて、固有の流動性を喪失した理由にも、何か絵巻物自体の民衆芸術としての不十分さがある様に思われる。惣じて文化の形成を単に社会機構の变革のみから説明する場合、無理が伴うのであつて、例えば室町の能、狂言一般を鎌倉の猿楽一般と対比し、その変化を南北朝内乱によつて説明する方法に一応の正しさを認めるにせよ、同時に能・狂言の形成過程が詞章その他の具体的分析によつて、より精實に跡付けられねばならない。

第三に中世文化についての氏の希望の見解は、氏の対象が主に畿内先進地帯の世俗的文化であつた事と無關係でない様に思う。惣領制支配の強い辺境にも、又仏教等の分野に於いても、氏の仮説の成否が検証される必要がある。要するに中世を支配勢力の弱体が齎した「明るい谷間」^{五頁}とすれば、逆に二重支配下の「暗い谷間」と言う評価も生れよう。

従つてこれらの点についての具体的な実証が望まれる。

第四に氏の研究に依つて中世が希望の時代となつた反面、暗黒は近世に移された観が無くもない。信長、秀吉の政策に一応の進歩性を認める私は、この点疑問を抱かざるを得ない。氏は勿論町人の中に微光を見出して居られるが、中世町衆と近世町人の夫々の社会に於ける存在形態の差違が追求される一方、近世が生んだすぐれた民衆文化の発掘を怠つてはならない。氏が引用された「すたる特世間にては却て茶湯繁昌と思ふべき也」^{六四}と言ふ利休の語は一応正しいにせよ、「茶湯繁昌と思ふ」のは何故かについても考うべき点が少くない。

然しこの提言は決して容易なものではない。また単に著者への願望ではなく、全歴史家への提唱である。唯私は中世文化を多面的プロテウスであつたとする相對主義を採る意図はない。以上の基礎研究を踏まえて中世文化の基調を——それが林屋氏と同じ結論を生むにせよ——再発見したいと考へるのである。そこに氏の労作を、中世暗黒時代説への

アンチテーゼに終らしめぬ為の後学の責務がある。

次に細かな点であるが、氏は平安時代に於ける仮名文字の發展が、民衆の言語の共通性を導き、民族意識の萌芽する地盤を培つたとし、草仮名の育成者を当時熱厲の境遇にあつた女性に求められた。この問題について歴史学研究会一九五一年度大会に於いて、氏は藤間生大、松本新八郎両氏と討議を交わされて居るが、草仮名の育成者を女性とする事に異論はない。但私はこの事実と、草仮名が民衆を連契する地盤を作つたと言う事の直接の結び付けは拒否したい。育成者は主に宮廷女官であり、彼女達の隷屬性もその限りに於ける隷屬性であり、彼女達はどうして容易に民衆と結び得たであろうか。更に仮名を高く評価する事自体についても、言語の共通性を導く契機は、言語の本質より見て、当然文字よりも発声言語に重点があると考へる。

最後に氏は川島元次郎氏等の定説に従い、文禄元年秀吉御朱印船發遣説を採られ、角倉了以の海外雄飛を更に以前に遡及された^{四七}。此に氏に直接關係する問題でないかも知れぬ

が、岩生成一氏は文禄元年説を証拠付ける文書がより後年のものとして文禄元年説を否定され、その理由の一に、糸割符商人茶屋が加つて居る事を挙げられた。^(御朱印發遣易家の性徳社會經濟史學一七ノ二)私も岩生成説に同意するが、更に文禄元年説の証拠たる「長崎志」に「角倉一艘」とある角倉は、同様の事実を記した「長崎拾芥集」には「角倉与市」とある事を指摘したい。与市(一)が父了以に代つて朱印船貿易を営むのは、慶長十六年以後であつて、^{異同御朱印帳到底文}禄元年説は成立し難いと思ふ。

以上平素の御厚誼に甘えて妄言を連ねたが、未熟な紹介が氏の高説を誣るものがあつたとすれば御叱正をお願ひする。尚長友藤本康彦君等の手に成る索引が、本書の利用を益々便ならしめている事を付記する。(東京大学出版会刊、三九〇頁、五八〇円)

村山修一著

日本都市生活の源流

本書は中世都市としての京都について、都